普通期水稲主食用米品種
「ひなた舞」
栽培マニュアル



令和８年３月

宮崎県総合農業試験場

はじめに

本県が開発した『ヒノヒカリ』は、これまで普通期水稲の主力品種として、県内はもとより西日本を中心に広く栽培されてきましたが、近年、気温上昇の影響により、白未熟粒の発生など品質の低下が深刻化しています。

県では、平成２０年に、地球温暖化の進行を見据え、宮崎県農水産業温暖化研究センターを総合農業試験場に設置し、「温暖化から守る」「温暖化を活かす」「温暖化を抑える」の３つの視点から研究を推進してまいりました。

そして令和７年、暑さに強い普通期水稲主食用米新品種『ひなた舞（ひなたまい）』を育成したところです。

『ひなた舞』は『ヒノヒカリ』に比べ暑さに強く、高温条件でも品質が低下しにくいことに加え、収量が多く、食味も『ヒノヒカリ』並に優れますが、その特長を発揮させるためには、『ひなた舞』に合った土づくりや適切な施肥、苗の植付密度等の栽培管理が重要となります。

本マニュアルは、総合農業試験場内外のデータに基づき、『ひなた舞』を栽培するにあたっての技術的なポイントをまとめたものであり、生産者の皆様、関係機関の皆様におかれましては、活用いただきますようお願いいたします。

令和8年3月吉日

宮崎県総合農業試験場

場長　下田　透

目　次

Ⅰ　品種の紹介

1　品種特性（南海177号×関東257号の系譜）　・・・Ｐ１

2　導入のメリット（多収・高品質・作期分散）・・・Ｐ２

Ⅱ　栽培上の留意点

1　ほ場選定（水と地力の確保、集団化・団地化）・・Ｐ３

2　収量構成要素・・・・・・・・・・・・・・・・・・Ｐ４

3　栽培上の重点４項目（施肥・密度・水・収穫）・・Ｐ４

Ⅲ　栽培管理のポイント

1　土づくり（深耕・堆肥・ケイ酸資材）・・・・・・Ｐ５

2　育苗（種子消毒と温度管理）・・・・・・・・・・Ｐ６

3　移植（時期と栽植密度の目安）・・・・・・・・・Ｐ７

4　施肥（基肥と穂肥の施用）・・・・・・・・・・・Ｐ８

5　水管理（中干しと出穂後の飽水管理）・・・・・・Ｐ９

6　病害虫防除（晩生品種特有の注意点）・・・・・・Ｐ10

7　適期収穫（積算気温による適期判断）・・・・・・Ｐ11

Ⅳ　その他（お問い合わせ先）・・・・・・・・・・・・Ｐ12

1　品種特性

収量性が高く暑さに強い“極良食味”品種

①交配来歴

・味と品質に優れる「南海177号」と、味・品質に加えていもち病に強い「関東257号」の交配により育成

②生育特性（「ヒノヒカリ」との比較）

- 出穂期及び成熟期：３～４日遅い
- 稈長・穂長：やや長い
- 穂数：やや少ない
- 耐倒伏性：同程度

表１　「ひなた舞」と「ヒノヒカリ」の品種特性

品種名	「ひなた舞」	「ヒノヒカリ」
早晩生	中生の晩	中生の中
出穂期(月/日)	8/24	8/21
成熟期(月/日)	10/4	9/30
稈　長（cm）	84.1	83.6
穂　長(cm)	21.6	19.8
穂　数(本/m^2)	342	379
耐倒伏性	やや弱	やや弱
精玄米重(kg/a)	61.2	55.5
同上標準率(%)	110.2	100.0
玄米千粒重(g)	25.0	21.8
検査等級	5.0	6.3
玄米ﾀﾝﾊﾟｸ質含有率(%)	6.1	7.1
食味官能値	0.38	0.00

※2016～2024年の平均
※検査等級は１（１等上）～10（規格外）の10段階での評価

③収量性および品質

- ヒノヒカリよりも**約１割多収**
- **高温条件下でも品質が低下しにくい**
- 大粒で**極良食味**
- いもち病に強い

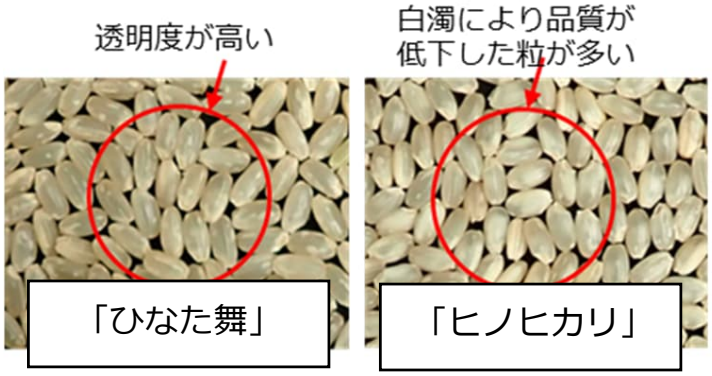


図１ 玄米品質の比較

表２　「ひなた舞」と「ヒノヒカリ」のいもち病検定結果

品種名	葉いもち	穂いもち
ひなた舞	強	強
ヒノヒカリ	中	やや弱

※2016～2024年の平均
※強から弱の５段階で評価

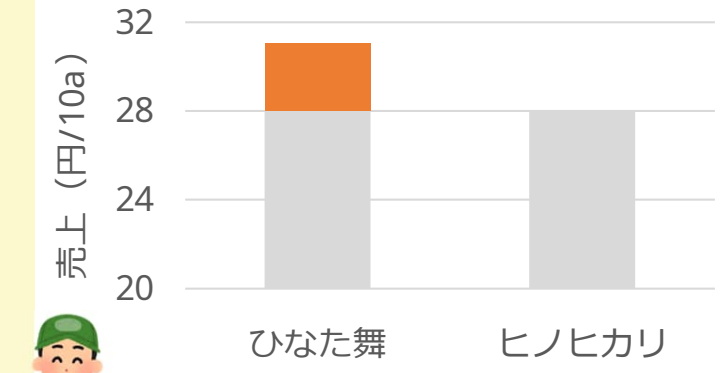
2　導入のメリット

新品種導入により所得アップと規模拡大を実現

①多収で高品質のため所得が向上

・ヒノヒカリよりも10%多収
・高温でも品質が低下しにくい
（地球温暖化に対応）

収量・品質の向上で所得向上
約3万円/10aの売上増（試算）



※「ひなた舞」の反収は550kg/10aで１等相当（単価は33,600円/60kg）と仮定
※「ヒノヒカリ」の反収は500kg/10aで２等相当（単価は33,300円/60kg）と仮定

図２　収量・品質の違いによる売上の比較

②作期分散が可能になり規模拡大に対応

- ヒノヒカリより晩生なので作期分散が可能
- 機械や効率的な労力利用が可能であるため規模拡大にも対応

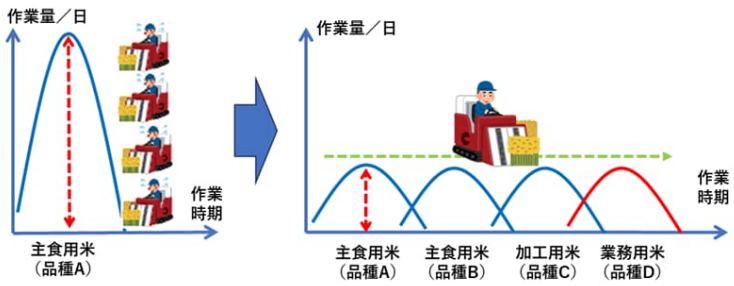
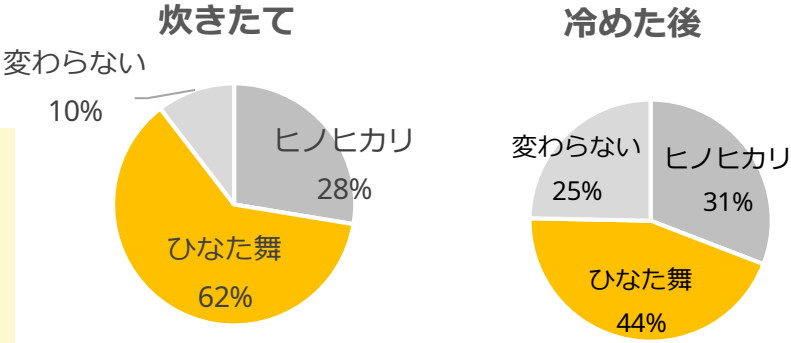


図３　収穫作業スケジュールのイメージ

③食　味

- 「炊きたて」だけでなく「冷めた後」でもおいしい
- 関係者のアンケート結果でも好評





※2025年2～３月にＪＡ・県関係者で炊きたては134人、冷めた後は81人で食味調査を実施

図４　「ひなた舞」と「ヒノヒカリ」の食味アンケート

1　ほ場選定

①生育終盤まで水と地力を確保する

大粒で穂が大きい「穂重型」であり、熟期が長い中生品種

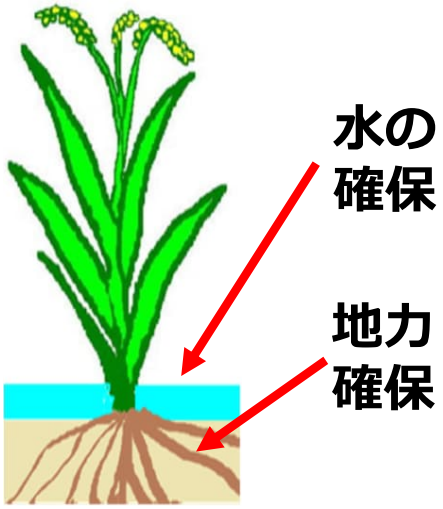
↓

生育の終盤の水不足や肥料不足は減収や品質低下のリスク

↓

- **収穫５日前までの通水**が可能なほ場を選択
- 堆肥等で地力のあるほ場を選択
- 秋落ち田や漏水田、極端な砂質田での作付は控える

生育終盤の水分・肥料不足の防止



②作付ほ場の集団化・団地化を図る

品種毎に作付ほ場をブロック化

↓

- 水利用や栽培管理の効率化
- 異品種混入リスクの低減

ほ場の団地化で作業効率向上

ヒノヒカリ	ひなた舞
WCS用稲	飼料用米

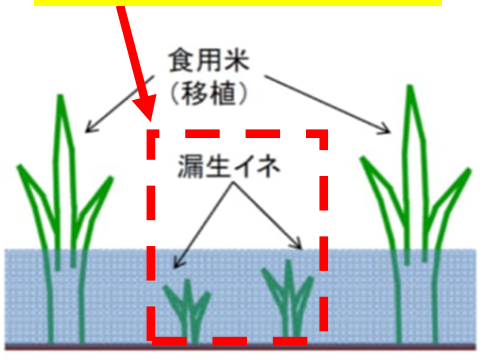
③前年産の落下籾対策を徹底する

漏生イネ（＝前年産の落下籾）は、異品種混入の大きなリスク

↓

- 作付ほ場を固定する
- 代かき前の非選択性除草剤散布

漏生による異品種混入防止



2　収量構成要素

穂数を増やしすぎず、粒の充実に努める

表３「ひなた舞」の収量構成要素等の目安

収量	収量構成要素					品質
	穂数	１穂籾数	㎡当籾数	登熟歩合	千粒重	玄米タンパク質含有率
（kg/10a）	（本/㎡）	（粒/穂）	（万粒/㎡）	（%）	（g）	(%)
550	350	80	2.8～3.0	80以上	24	6.5以下

3　栽培上の重点４項目

品種特性（大粒）に合わせた栽培管理の徹底

①適切な施肥

・基肥窒素の目安：3kg/10a
・後半の肥切れ防止
＊P ８参照



②適切な栽植密度

・栽植密度の目安：50～70株/坪
・極端な疎植を避ける
＊P ７参照



③生育に合わせた水管理

・目標茎数確保後は速やかに中干し
・出穂後の飽水管理
＊P ９参照



④適期収穫

・収穫期の目安は出穂後39～43日
・出穂後積算気温の目安：1,074～1,176℃
＊P11参照



1　土づくり

①15cm以上の作土深を確保（深耕の実施）

- 作土深を深くするほど整粒割合が高く、白未熟粒割合が低下し、籾の充実が向上

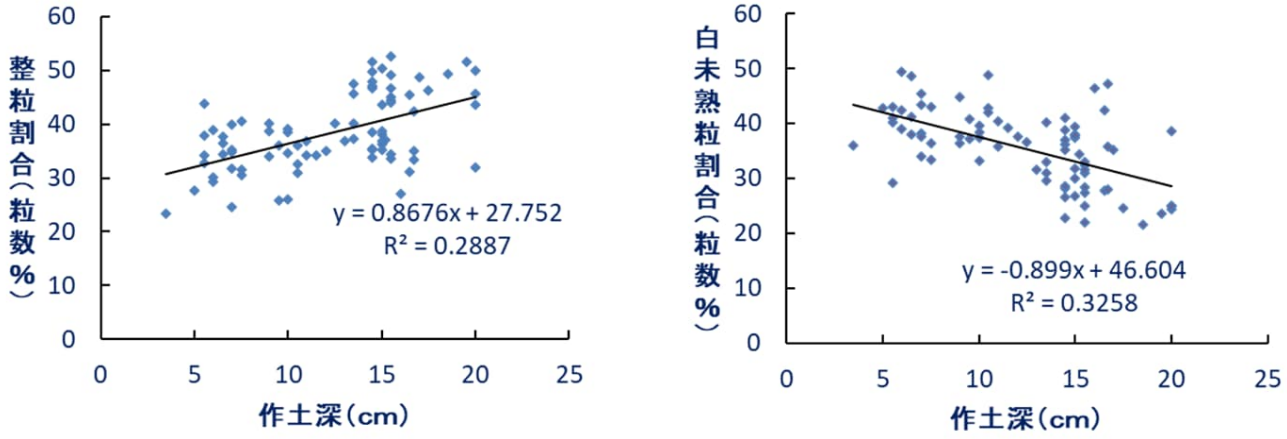


図５　作土深と整粒及び白未熟粒割合との関係（2010年：総合農試データ）

②堆肥施用により地力を維持

- 地力の増強には堆肥の連年施用が有効
- ただし、可給態窒素が過剰になると玄米タンパク質含有率が高くなり、食味が低下
- 地力窒素の適正値（8～20mg/100ｇ乾土）を超える場合は施肥量の調整が必要

③ケイ酸資材を施用し高温や病害虫に強い稲をつくる

- ケイ酸分の補給は、水稲の倒伏軽減や玄米の品質向上に有効
- ケイ酸質資材の施用により、光合成量の増加、受光態勢の改善、根活性の向上や枯れ上がりの抑制、耐病害虫性の向上等を期待できる

2　育　苗

①「ヒノヒカリ」同様、浸種・種子消毒を徹底

- 薬剤による種子消毒は「ヒノヒカリ」と同様に行う
- 温湯消毒を行う場合は60℃の湯に10分間浸漬処理する
- 浸種や催芽も「ヒノヒカリ」同様に行う
- 芽が伸びすぎないよう水温に注意する
- 催芽は水温30～32℃を目安に実施する

②苗が徒長しないよう播種量・温度管理に注意

- 「ヒノヒカリ」同様に播種を行う
  ＊１箱当たり150ｇ（乾籾）が目安
- 「ヒノヒカリ」よりも苗が徒長しやすい傾向であるため育苗期間中の温度管理等を徹底する
  ＊特に、緑化期以降は高温とならないようにする
  ＊かん水時は、水をかけすぎないようにする

表４　苗生育の目安

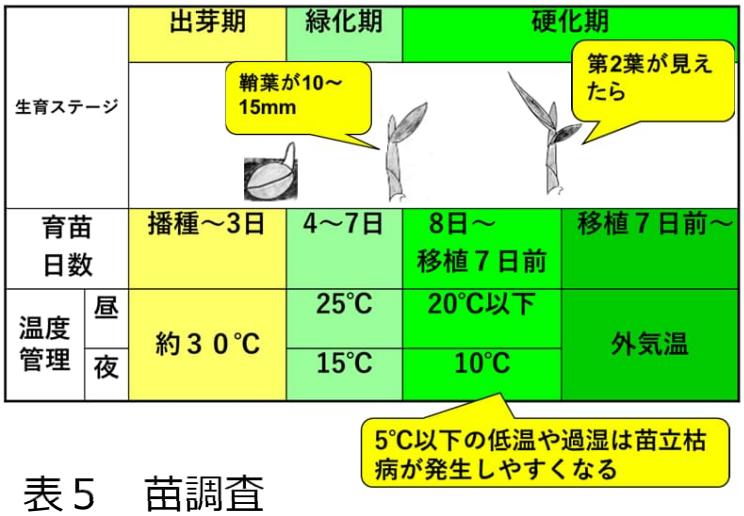


表５　苗調査

品　種	苗長(cm)	苗令(L)	第一葉鞘高(cm)
ひなた舞	16.5	3.3	3.2
ヒノヒカリ	14.9	3.3	5.4

1）2021～2024年の4年間の平均

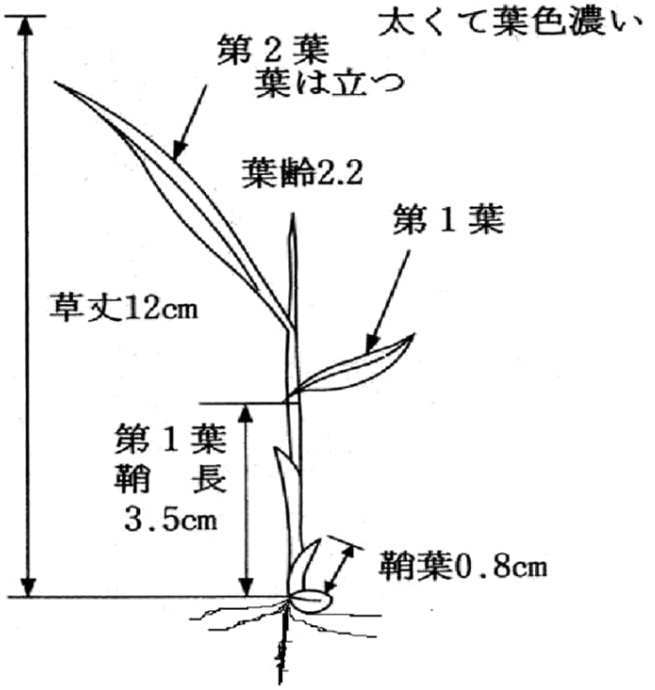


図６　目標とする健苗

3　移　植

①移植時期は６月上旬～下旬を目安にする

- 6月に移植した場合、出穂期は８月下旬頃成熟期は10月上旬頃となる
- 中生の晩の穂重型品種であるため、極端な早植えや遅植えは避ける

表６　移植時期別生育ステージ

移植時期	出穂期（月日）	成熟期（月日）
6月6日	8月22日	10月1日
6月16日	8月28日	10月5日
6月26日	9月1日	10月11日

②栽植密度50～70株/坪（株間21～16cm）を目安にする

- 坪当たり50株（株間21cm）で植えた場合に、穂数が少なくなるが、1穂籾数が増加するため減収しない

＊ただし、地力が低い場合、疎植では、穂数が確保できず、減収する可能性

- 栽植密度による品質差は、特にみられない

＊ただし、極端な疎植（株間25cm以上）では、遅れ穂等による品質低下の可能性

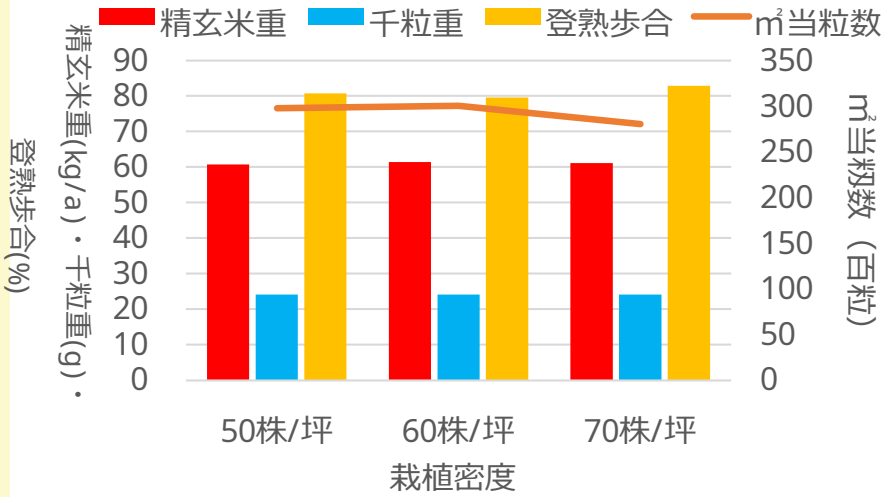


図７　栽植密度が収量等に及ぼす影響

表７　栽植密度別穂数、籾数及び品質

栽植密度	穂数（本/㎡）	1穂粒数（粒）	㎡当粒数（百粒）	整粒（%）	背白（%）	玄米ﾀﾝﾊﾟｸ（%）
50株/坪	318	94.4	298	71.6	6.0	6.5
60株/坪	352	86.8	300	70.0	6.3	6.6
70株/坪	343	82.8	280	71.6	6.1	6.4

※土壌中の可給態窒素量は12～17mg

※整粒・背白はサタケ穀粒判別器RGQI20Aで測定

※玄米タンパクは静岡精機食味分析計AG-RDで測定

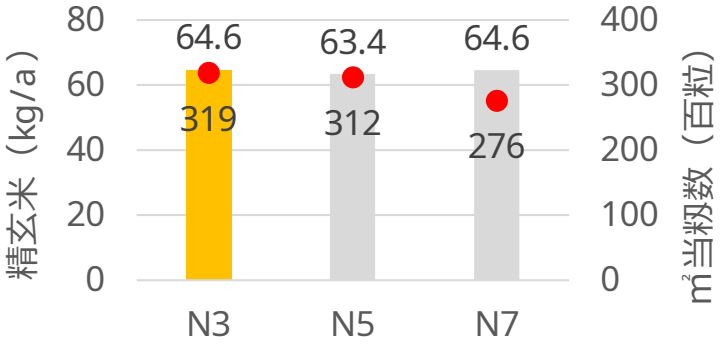
4　施　肥

①基肥は、窒素3kg／10aを目安に施用する

- ㎡当たり籾数
  基肥窒素3kg/10a以上
  →　変化なし

- 玄米タンパク質含有率
  基肥窒素5kg/10a以上
  →　タンパク上昇、食味低下

- 土壌診断に基づく施肥
  →　地力の高いほ場では基肥の減肥が必要



※穂肥はN3kg/10a施用
※土壌中の可給態窒素量は13.17mg

図８　基肥窒素量の違いが収量等に与える影響

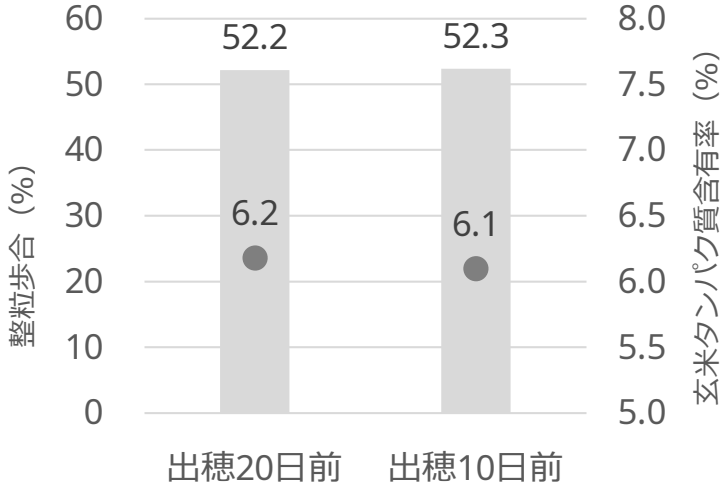
表８　基肥窒素量の違いが玄米品質に及ぼす影響

区分	整粒歩合 (%)	乳心白 (%)	背白 (%)	その他未熟粒 (%)	玄米タンパク質含有率 (%)
N3	52.2	2.8	11.3	19.9	6.4
N5	52.5	4.7	8.5	21.0	7.3
N7	59.1	4.3	6.8	14.8	7.2

※整粒からその他未熟粒の項目は、目視により判別（1サンプル200粒）
※その他未熟粒は、整粒・乳心白粒・背白粒・茶米・基部未熟粒・青未熟粒・青粒に該当しない粒
※玄米タンパク質含率は静岡製機食味分析計「AG-RD」にて測定

②穂肥は、倒伏防止・登熟向上のため出穂20～10日前を目安に施用する

- 適期（出穂20～10日前）の施用であれば、玄米タンパクの上昇や整粒率の低下は発生しにくい
- 「ヒノヒカリ」よりも大粒の品種であることから、葉色の低下がみられたら、出穂10日前頃であっても穂肥を実施し生育後半の肥切れを防止する



※基肥はN5kg/10a施用
※土壌中の可給態窒素量は13.08mg
※整粒からその他未熟粒の項目は、目視により判別（1サンプル200粒）
※玄米タンパク質含率は静岡製機食味分析計「AG-RD」にて測定

図９　穂肥時期の違いが玄米品質等に及ぼす影響

5　水管理

①有効茎を確保したら速やかに中干しを行う

- 過剰な分げつや弱小茎（穂）、遅れ穂は収量や品質低下を招くので、有効茎(20本/株程度）を確保したら速やかに中干しを行う
- 中干し期間は、１週間を目安とする
- 中干の程度は、田面に少しヒビが入る程度

②出穂後の高温時は、飽水管理を実施し品質低下を防止する

- 出穂期以降は、根に水分や酸素をバランス良く供給するため間断かん水を基本とする
- ただし、高温時は、根の活性を維持するため地温低下を意識した水管理を行う
  ＊水が豊富な地域では、冷水掛け流しが有効である
  ＊掛け流しに必要な用水の確保が困難な地域では、飽水管理を実施し、昼夜の水温や地温上昇を抑制する
  ＊飽水管理とは土がようかん状で、足跡に水がたまる程度の湿潤状態を保つ水管理のこと



図10　飽水管理時の水田

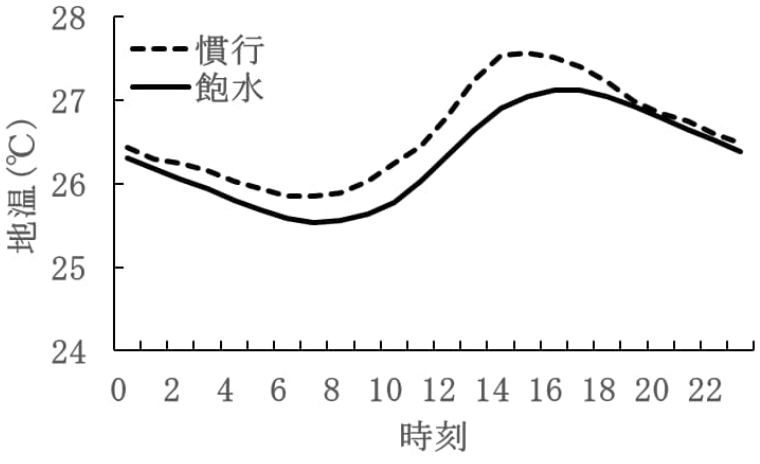


図11　飽水管理時の地温の推移
（2020年：総合農試データ）

6　病害虫防除

①生育終盤まで、病害虫防除を徹底する

基本的に「ヒノヒカリ」より成熟期が遅いので、同様の病害虫防除体系とするが、生育終盤まで防除を徹底する！

主な病害虫	「ひなた舞」での留意事項	防除のポイント
いもち病	「ヒノヒカリ」よりも病害に強いものの防除の徹底が必要	箱施薬や穂揃い期等の基幹防除を徹底する
紋枯病	中生で登熟期間が長くなるため、生育終盤までの防除を徹底する	常発地では、箱施薬や生育中盤での粒剤防除を実施する
ウンカ類	中生で登熟期間が長くなるため、生育終盤の加害に注意する	箱施薬をはじめとした基幹防除を徹底する
斑点米カメムシ類	中生品種のため、生育終盤までの集中加害に注意する	穂揃い期やその７～10日後の基幹防除を徹底する
稲こうじ病	中生で窒素肥料が後効きすると発生が増加するので注意する	常発地では、出穂10日前頃の銅剤の防除を徹底する

具体的な病害虫防除に関しては、地域の栽培暦を参考にするとともに、農薬散布時はラベルをよく読み、農薬登録内容を遵守する！！

7　適期収穫

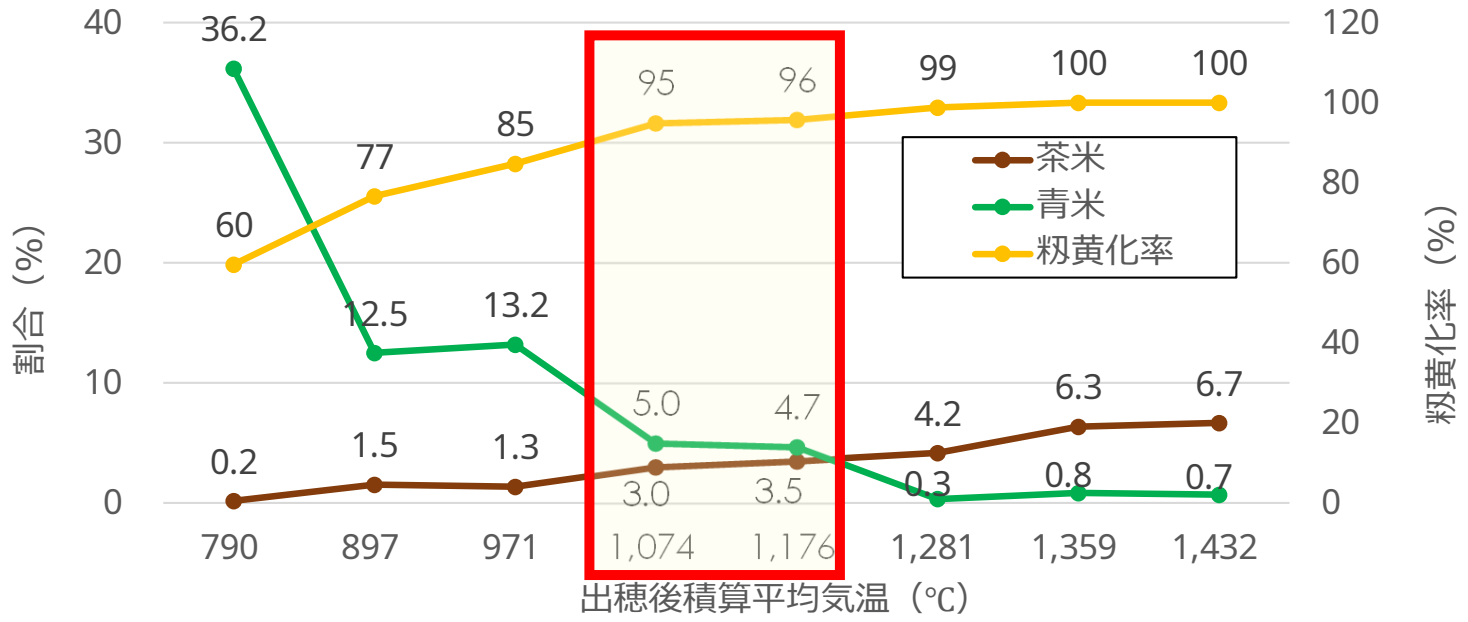
①出穂後39～43日（積算気温1,074～1,176℃）を目安に適期収穫を行う

- 出穂後の積算気温897℃以下の収穫では、収量や品質が低下する
- 刈り遅れは、品質や食味の低下を招く
- 収量や品質、食味の面から積算気温で**1,074℃～1,176℃が収穫適期**となる
  ＊出穂後39～43日
  ＊籾黄化率95～96%が目安
- 収穫時は、必ず籾の黄化程度を確認して行う
  ＊籾黄化率は株の最長稈穂を1本採取し調査

表９　収穫時期の違いが玄米品質、収量等に与える影響

出穂後積算平均気温 (℃)	整粒歩合 (%)	精玄米重 (kg/a)	玄米千粒重 (g)
790	35.2	56.5	26.0
897	55.3	62.3	26.2
971	52.2	62.2	25.7
1,074	50.2	63.5	25.9
1,176	56.7	64.3	26.0
1,281	57.0	66.8	26.0
1,359	49.2	65.9	26.0
1,432	50.3	65.0	25.9

※基肥はN5kg/10a、穂肥はN3kg/10a施用
※土壌中の可給態窒素量は13.08mg
※平均気温は、気象庁のアメダスの観測地（宮崎市）を使用
※整粒歩合は、目視により判別（1サンプル200粒）
※最長稈穂を1本採取した連続する15株を刈り取り、精玄米重、千粒重を調査



※青米・茶米は、目視により判別（1サンプル200粒）
※籾黄化率は、連続する15株の各株の最長稈穂を1本採取し、ただちに籾黄化率を調査

図12　収穫時期の違いが玄米品質、籾黄化率に与える影響

Ⅳ その他

【お問合せ先】

○　本マニュアルについて

・宮崎県総合農業試験場 作物部
電話：（０９８５）７３－２１２６

○　「ひなた舞」全般について

・宮崎県農産園芸課　水田農業担当
電話：（０９８５）２６－７１３６

○　地域に合わせた栽培、現地指導について

・中部農業改良普及センター　農畜産経営担当
電話：（０９８５）３０－６１２１
・南那珂農業改良普及センター　農畜産経営担当
電話：（０９８７）２１－９５５０
・北諸県農業改良普及センター　農畜産経営担当
電話：（０９８６）３８－１５５４
・西諸県農業改良普及センター　農畜産経営担当
電話：（０９８４）２３－５１０５
・児湯農業改良普及センター　農畜産経営担当
電話：（０９８３）４３－２３１１
・東臼杵南部農業改良普及センター　農畜産経営担当
電話：（０９８２）６８－３１００
・東臼杵北部農業改良普及センター　農畜産経営担当
電話：（０９８２）３２－３２１６
・西臼杵農業改良普及センター　農畜産経営担当
電話：（０９８２）７２－２１５８

【発　行】

宮崎県総合農業試験場 作物部